

百済大寺・大官大寺から大安寺へ —国家筆頭大寺の歩み—

東京学芸大学名誉教授・奈良文化財研究所名誉研究員 木下正史氏

火曜午餐会・9月第2例会は、15日12時15分から当部5階大会議室で、講師に木下氏を招き開催した。奈文研で20年余りの間、飛鳥・藤原地区の発掘調査研究に携わって来られた木下氏。「東大寺が出来るまで国家寺院で一番格が高かった大安寺は、現在の20倍の敷地を誇る日本最大の寺院でした。平安時代の火災等で次第に衰退したが、考古学的にも歴史学的にも解明出来る大安寺の値打ちを知って頂きたい」と、発掘現場の写真や資料を交えて語った。参考文献「大安寺 国家筆頭大寺へのあゆみ」東方出版2020

仏教信仰の始まり

538年百済聖明王が欽明天皇に信仰を勧めたのが仏教信仰の始まりで、蘇我馬子が造営した飛鳥寺が我が国最初の本格的寺院。推古天皇の仏教興隆の命により、権力者は競って氏寺を造ったが、主導権が朝廷に移ると国家寺院である官寺を中心に鎮護国家仏教へと歩みを強めていく。

大安寺の歴史

舒明天皇が聖徳太子を病床に見舞った際、太子建立の熊凝精舎の後事を託され百済川側に造った百済大寺が大安寺の出発点である。天武天皇は百済大寺を高市郡に移し高市大寺と号し、その後、官大寺の筆頭格を象徴する大官大寺に改名した。続日本紀には天武天皇の孫の文武天皇も大官大寺を造営したとある。

大官大寺は平城遷都で藤原京から奈良に移り、遣唐留学僧の道慈が差配して現在地に大安寺として造営した。25万平方メートルに及ぶ広大な寺域に90余棟の建物が立ち並び、887名という学侶が居住して、仏教の基礎研究の拠点となり、仏教文化の受容と伝播に重要な役割を果たした。このように、百済大寺、高市大寺、大官大寺、大安寺と変遷した歴史がある。なお、百済大寺・大官大寺に国家筆頭大寺の象徴として建立された九

重塔は、平城京では七重塔になる。

大官大寺跡

奈文研の10年に及ぶ調査により、江戸時代以来、天武天皇建立と考えられてきた藤原京大官大寺跡が、文武天皇建立の大官大寺で、奈良時代の火災で全て消失していた事がわかった。天武天皇建立の大官大寺の前身、百済大寺は移転に伴い廃寺になったが、天智天皇施入の資財等が大安寺に伝わったのは、火災で焼けずに併存していた文武天皇建立の大官大寺に移されたと考えられる。

吉備池廃寺の発掘

廃寺になり所在が不明だったが、

1997～98年、奈文研により、桜井市吉備池廃寺の発掘を行ったところ、壮大な伽藍、九重塔、創建年代等から、百済大寺跡であることが判明した。

百済大寺は、聖徳太子が青年期まで過ごした「上宮」近くに造営されていた。

東アジア諸国の 国家筆頭大寺

6～7世紀、東アジアの国家筆頭大寺では鎮護国家仏教の象徴として九重塔が建立されている。百済大寺、大官大寺と同様、発掘調査により、北魏の永寧寺、新羅の皇龍寺、百済の弥勒寺にも建立されていたことから、東アジアの国家間で、仏教文化など様々な交流が行われていた事がわかる。

